

医は仁術、教職は…

岡山教育事務所長

平 賀 和 治



先日、教え子の結婚式に招かれた。御祝いのスピーチの際に、新郎からは「僕を初めて叱ってくれた先生です。」また、新婦からは「みんなの前ですごく褒めてくれた先生です。」と紹介された。六年生を担任した時のクラスメイト同士の結婚式である。

新郎は、まじめでやさしく、それまで叱られたことがほとんど無く、周りの友だちからはイタズラや失敗をしない優等生と思われていたらしい。それに誇りを感じながらも、少し窮屈な思いをしていたようであるが、私が担任になり、「授業中に何をボヤッとしている。」と一喝されたことで、友だちからの評価が変わり、それからは、友だちとの距離が縮まり、仲も深まったようである。

また、新婦の方は、折れ曲がり散乱していた下足箱前の靴ふきマットを、本人としては何気なく直したところを、たまたま私が見ていたらしく、その日の朝の会で、「人の見ていないところで、こういうことができる人はすばらしい。」と褒めてもらったというのである。どちらも、当の本人は忘れてしまっていたのであるが…。

新採用の頃に読んだ体育科研究者の高田典衛氏の著書に、「医師は、人を相手にして、診察・診断・処置を施すが、これを誤ると命に関わる。日々、真剣勝負である。教師も、同じく人を相手にする仕事であるが、それだけの覚悟を持って子どもに対しているか。教師の指導が、その人の一生を左右するのである。」といった趣旨のことが書かれてあり、教職に携わったことへの畏怖と重責を感じたことを記憶している。

子どもは教師に出会い、身内以外の大人を知り、「人」を知る。教師の一言一言、一挙手一投足を毎日見て育つのである。教師の影響力は深大である。また、教師として、出会った子どもをどう認識し、その子のどういったよい面をさらに伸ばし、よくない面があれば、どうやって気付けさせるのか。医師に及ばずとも、至極責任ある職業である。

さて、この二人。お互いのどこを気に入ったのだろうか。彼のまじめさか彼女の淑やかさか。はたまた、やさしさか気配りか。それとも私の見抜けなかったお互いのよさだったのか。